

## 倫理学

### ◇教員◇

准教授 中野裕考、古田徹也、板東洋介

助教 加藤喜市

### ◇学生◇

学部 28名 修士課程 7名 博士課程 5名

「倫理学」という学問に、人が抱くイメージや期待にはおそらくさまざまなものがあるだろう。日常の行為の善悪について研究するというのを思い浮かべる人もあるであろうし、また、ソクラテスの生に重なるような「よき生」の追求を思い描く人もあるだろう。自らの人生についての問いを直接重ねようとする人もあるだろうし、また、今日的な社会問題への積極的な発言を期待する人もいよう。倫理学専修課程に進学してくる学生諸君の思いも、そのようにきわめて多様なものであろう。

しかし、それが文学部のなかで、しかも思想系の学問分野の中での倫理学研究となると、そのありかたも限定されてくる。文学部の学問が原典テキストの精密な読解を身上とするように、倫理学専修課程の学問も、倫理学についての原典テキスト、就中古典のテキストの読解をその基本とすることになる。その点では思想史研究が中心となるのであり、現実的課題との関わりは間接的なものにとどまるということになるだろう。そのことはしかし、倫理という言葉に対する各人各様の思いを否定するものでは決してない。むしろ古典の読解にこそ、それぞれの思いが最も豊かな奥行きをもって現実化する場面があるというのが、われわれの確信である。

したがって、倫理学専修課程は、独断と空理空論を控えるという最低限の謙虚さを要求される以外は、きわめて自由な雰囲気には満ちている。かつてこの研究室の主任教員であった**和辻哲郎**は、日本近代において特筆すべき倫理学の体系を築き上げたが、それは、西洋思想と東洋思想の融合および規範学としての倫理学と事実の学としての諸学の融合を目指したものである。さらに、和辻は、倫理学以外に広く人文科学一般の分野でめざましい成果を上げたことで知られているが、この多様な学問領野に開かれているという性格は、今日においてなお生きていると言えるのであ

る。学生の研究対象の選択も各人の大幅な自由に任されており、実際、これまでの卒業生の研究テーマも、洋の東西を問わず、また古代から現代に至るまで、まことに多彩である。

倫理学専修課程の講義・演習の対象領域は、西洋の倫理思想と日本のそれとに二大別される。倫理学がいち早く自覚的な形態をとった西洋の思想伝統を学ぶことは、日本倫理思想史を専攻しようとする学生にとっても欠かすことはできない。一方、西洋の倫理学に関心を持つ者にとっても、自らが背負う伝統との対話は必要である。相異なる領域への幅広い目配りが求められるのが当専修課程の特色である。

以下、教員の紹介を兼ねて、令和7年度に倫理学専修課程が実施した全授業を列挙する。

**中野裕考 准教授**は、内から外へ、外から内へという両方向からアプローチしつつ西洋近代思想の限界を突破すべく、一方では16世紀末スペインのフランシスコ・スアレスから18世紀後半のイマヌエル・カントに至るドイツのスコラ哲学をたどり、他方ではラテンアメリカにおける哲学受容史および先住民言語や口承伝統に基づく思想研究の可能性を探求している。「**西洋倫理思想史概説Ⅰ、Ⅱ**」では、「在るもの」「一」「真」「善」といったいわゆる超越範疇が、古代から現代にわたって西洋の知の基底に滞留している様子を描いた。「倫理学演習」では、スアレス『形而上学討論集』『第一討論』や、カント『人倫の形而上学の基礎づけ』第三章を、それぞれラテン語、ドイツ語原典で精読した。これにより長期的な視野から、しかし精密に事態を捉える訓練を行なった。

**古田徹也 准教授**は、「言語」「心」「行為」の各概念を手掛かりにして、主に英語圏とドイツ語圏の現代哲学・倫理学を研究している。主に関心を向けているのはルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学である。「**倫理学概論**」では、倫理学の基本概念と基本問題をめぐって、古今の思考を跡づけることを通じて、倫理学的思考のありようを捉える講義をおこなった。また、「倫理学演習」では、ウィトゲンシュタインの名著『哲学探究』を精読するほか、現代の英語圏の倫理学における基本文献を批判的に検討し、西洋倫理思想に本格的に足を踏み入れるための知識と思考能力を受講生が養うことを企図した。さらに「**倫理学特殊講義**」（※加藤喜市助教との連名講義）では、倫理思想史全体の鍵となるいくつかの概念および思想家について概観し、倫理学という学問に入門する手引きとした。

**板東洋介 准教授**は、とくに「型」や言語の問題に注目しながら日本倫理思想史を研究している。近年はとりわけ日本近世の儒教や国学、神道思想を主要な研究対象としている。「**東洋倫理思想史概説**」では、生の意味をめぐる近年の議論を補助線としつつ、古代から近現代にいたる日本倫理思想史を通観する講義を行なった。また「倫理学演習」では、代表的な民俗学者である折口信夫の「妣が国へ・常世へ」「大嘗祭の本義」「死者の書」などの代表的なテキストを講読したほか、近世儒教の重要テキストである伊藤仁斎の『童子問』の逐条的・逐語的な精読を行なった。また「**倫理学特殊講義**」では、密教や国学の言語論を手がかりとしつつ、日本語そのものをもつ思想性について思想史的な観点から講じた。

その他、令和7年度の非常勤講師による講義の題目は以下の通りである（肩書きは令和7年度当時のもの）。

|                     |   |
|---------------------|---|
| 吉田真樹講師<br>(静岡県立大学)  | 倫理学特殊講義(Ⅱ)「物語の倫理」                       |
| 佐々木雄大講師<br>(日本女子大学) | 倫理学特殊講義(Ⅲ)「20世紀フランス思想を<br>バタイユを視軸にして読む」 |
| 上野太祐講師<br>(神田外語大学)  | 日本の思想と宗教「倫理想としての能」                      |

このように、倫理学専修課程は、一方では古典的学問研究を尊重しつつも、他方では、哲学、社会科学、宗教学、日本思想等の諸学問に開かれた幅広い内容を持つ学問を目指しているという点で、思想系学科のなかでも特徴を示していると言える。そのことは、当専修課程を卒業し、その後研究者の道に入った先輩の学問にも明らかである。そのような条件をどう生かすかは、学生諸君の自発的研究に期待されている。

なお、卒業生の進路について言えば、当専修課程を卒業した後、大学院への進学を希望する者、官公庁・民間企業に就職する者等、さまざまである。就職先も、公務員、マスコミ、出版社、金融、広告代理店、製造業等、きわめて多彩である。